

低学年教育の創造

— やぎさんとくらしたよ —

足利市立松田小学校 多田 一雄



♫ しろいおひげのやぎさん
これからいっしょにくらそうよ
べんきょうおしえてやぎさん
みんなのともだちよろしくね

しろいおかおのやぎさん
これからいっしょにくらそうよ
おさんぽいっしょにやぎさん
みんなのひろばであそぼうよ
♪

(作詞・作曲 松田小1年)

平成元年11月11日、松田小学校1年生17人に新しい仲間が加わった。

名前は「めぐみちゃん」。小俣町にある足利めぐみ幼稚園から借り受けた1頭のメスやぎ？である。なぜ？マークか。それは、子供達とやぎさんとのくらしで起こるある事件を考えるとどうしても必要なことだからである。

ともあれ、この日から約1年5ヶ月、2年生の終わりまでやぎさんとのくらしが始まったのである。慣れないめぐみちゃんにふりまわされる日々。めぐみちゃんの背中に乗り遊ぼうとする子供。めぐみちゃんのふんを追いかけ、笑いころげる子供達。せっせとえさくれを楽しむ子供達。みんなで力を合わせてつくった楽しい広場でのくらしだった。

この1年5ヶ月をふり返り、低学年の子供達の学びの姿を追ってみたいと思った。

動物が子供達の中に入る。新しい教科生活科の中にあって、とりわけ低学年の子供達には、かかわりの深くなることが考えられてくる。

動物とくらすということはどういうことなのか。

動物が子供達に与えてくれることってどんなことなのか。

子供達と過ごした日々をふり返り、動物と子供達のくらしから生まれた学びの姿を見つめてみたいと思う。

『飼いたいなあ』

5月の末、子供達は埼玉自然動物公園へ遠足に出かけた。キリン、馬、そして大きく羽を広げたくじゃくを見ては、歓声をあげていた。動物達と遊ぶ広場ではうさぎやモルモット、そしてやぎと遊ぶことができた。

平成元年度 松田小1年の学習予定表

	9	10	11	12	1	2	3
学級	船をばり 心算 心算	心算 心算	心算 心算	心算 心算	心算 心算	心算 心算	心算 心算
国語	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな
社会	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな
算数	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな
理科	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな
図工	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな
音楽	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな
道徳	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな	おはな おはな おはな

それらのことを考え、1年生の子供達とやぎさんのくらしを出発させようとした。

そして2学期。子供達とともに校長先生へのお願いの手紙を書き、やぎを飼うおゆるしを得に出かけたのであった。

返事はすぐこなかった。子供達には翌日の給食時にお答えするとのこと。子供達はひたすら胸を踊らせながらその時を待った。

休み時間はもとより、授業中もそわそわして落ち着かないようす。

浩彰が時計を見ては落ち着かない様子。「ねえ先生、校長先生早く来ないかな。」と心配そうに言った。

そしてお昼。校長先生が教壇に立つとともにごくりとつばを飲みこむ子供達。

「さんねんながらやぎをかってもいいことにします。」

大きな歓声が松田の山々にこだましていった。

前日、校長先生は職員に説明し、全職員の共通理解をはかって下さっていたのだ。

『やぎの牛乳?』

それからというもの、この話題は学校中に知れわたった。

家に帰りさっそく報告した佳恵は、

「あのね、うちのお母さんはやぎさんの牛乳を飲んで育ったんだって。」

「そうそう。うちのおじいちゃんもやぎさんの牛乳しぼっていたんだってさ。」

宣秋が言った。

「やぎの牛乳っておかしくない。牛乳は、牛のミルクだよ。やぎはやぎなんだから……えーと、やぎ乳じゃおかしいね。」

明るい笑い声が響いた。

『オオ!!ブレネリ!!』

9月の中旬、子供達はやぎを飼う場所を決め、広場づくりをすることになった。

「やぎ」という本を読んで、やぎは小高い丘が好きなのを知った子供達は、バックネット裏の校庭の一角を利用することにした。

そしてさく作りの木。これは、近くの林業を営む方にお願ひし、間伐材を無償で分けていただいた。

木を切り出していただき、子供達は2メートルぐらいの長さがいいと教わった

ことをもとにして、木を切り皮むきをしたのである。その数40本、子供達にはたいへんな作業だった。そして学校まで運ぶ。片道300メートルあまり運ぶことも、たいへんな仕事である。

しかし、やぎとのくらしを夢見る子供達には、つらい仕事も楽しい仕事となっていった。





そして何日かがたち、
「やぎさんに名前を付けよう。」
ということが話題になった。
話し合って意見がとうとう2つに分か
れた。

「メェーメェー泣くからメェーメェー
ちゃんがいい。」

と佳恵が最後までがんばった。

「めぐみ幼稚園から来たんだから、め
ぐみちゃんがいいよ。」

と言うのが大勢の意見にまとまっていた。

そんな子供達に教師は次のように投げかけた。

「みんなが産まれた時、お父さんやお母さんはどんなことを思って名前を付けたのだろうね。」
さっそく調べてきた子供達。自分の名前にはお父さんやお母さんだけでなく家族みんなの願い
がこめられていることを知った。そして自分の名前には、みよう字と名前ですでできていることを
考え、やぎさんの名前は「メェーメェーめぐみちゃん」と決まった。

名前を決める話し合いを始めて三日目のことだった。

『おちちがでないよ』

11月25日。めぐみちゃんのおちちをしぼったらでませんでした。

みんなはびっくりしていました。わたしもびっくりしました。

せんせいもびっくりしました。だれかが、「あっおちちがでないよ。」というとなんかあつ
まりました。

どうしてでないのか、みんなはかんがえました。 (靱山 侑子)

めぐみちゃんのおちちを飲みたいと願っていた子供達はとても不安になり、そのことを家で
話してきたようだった。

功が真先に言い出した。

「おちちは、ぼくたちが赤ちゃんの時お母さんのを飲んだでしょ。お母さんは、赤ちゃんが
できたのでおちちが出たんだってさ。だからめぐみちゃんも、赤ちゃんができればおちちが
できるようになるんだよ。」

うなずく子供達。赤ちゃんができるためには、結婚することが必要だということもわかって
いった。

そして、めぐみ幼稚園の紹介で、オスやぎを紹介してもらい群馬県笠懸町へ“お見合い”に
出かけた。わずか二週間ではあったが離れる時も涙を流す幸子がいた。

霜が校庭の草を真白く染めあげた12月の季節のこと。

めぐみちゃんはお見合いが成功し、めでたく妊娠したのである。

『めぐみちゃんの誕生日』

めぐみちゃんが生まれたのは昭和61年2月17日だった。年が明け平成2年2月17日が近付いてきた。めぐみちゃんの4才の誕生日が近付いてきたのである。

結婚してからというもの、子供達はめぐみちゃんの赤ちゃん誕生を願い一生懸命になって世話をした。やぎの本を読み赤ちゃんが産まれるまでの体の変わり方を調べた。えさはどれくらいあげたらよいか調べ、はかりを持ち出し量をはかってくれるようにもした。

やぎさんへの精一杯の気持ちをこめていった毎日であった。

そしてもうすぐ誕生日を迎える日、みんなで次のようなことを決め準備をしたのである。

○誕生日の歌づくり。

○だいすきなおからとりんごをあげる。

○今までお世話になった人を招待する。

当日は、たくさんの方が来て下さった。

めぐみちゃんを貸して下さっためぐみ幼稚園の方。

さく作りの木を提供して下さいました池森さん。

小屋を作ってくれた校務員の菊地さん。めぐみちゃんをお見合いさせてくれた笠懸町の高橋さん。さくの板を提供して下さいました新井村木屋さん。さく作りを手伝ってくれた父母の皆さんそして安藤校長先生。

これらの人々に囲まれ、めぐみちゃんの誕生日ができたのである。

おからをむしゃむしゃ食べるめぐみちゃんを前にして、「誕生日の歌」がこだましていた。

『わたしも入れてよ』

めぐみちゃんは、広場からよく脱走した。休み時間は校庭を走り回る。1年生の子供達はなかなかおさえることができなかったが、ある程度走り回るとまた広場へもどっていった。

ある時は、授業中1年室前のペランダのところにやってきて、教室の中をのぞきこんだりした。きわめつけは、昇降口から入り、1年室へひょっこりと顔を出してきた。これは2年生になっても同じで2年室にやってきた。

子供のにおいが伝わったのかもしれない。それからというもの、時々ひとりぼっちではかわいそうだということで、1年室前の芝生につなぎ、のんびりとすごす日もあった。

おかげで、ふんをかたずけるのにひとつぶずつ拾い、数を数える大切な勉強になった。

『桑の葉何枚食べるの』

2年生になり数の学習で千の位を学ぶ子供達。その学習のきっかけに、めぐみちゃんの一日に食べる桑の葉の数を調べることにした。

子供達は、様々な反応を示した。



10枚をひとたばにして教える子供。
100枚をひとたばにする子供。
1000枚をひとたばにしようとはりきる子供。ひとりひとりの持ち味を生かすように見とった。

そして結果的には100枚をひとたばにして袋づめし、めぐみちゃんにたえてみることにしたのである。

一度に食べる量は約1100枚。一日では約4000枚食べた。



国語の学習はもちろんのこと、算数の学習にも、めぐみちゃんはたくさんの教材を子供達に投げかけてくれた。子供達にとって何が学習材になるのか。ますます考えざるをえない私であった。

『たまごができないよ』



5月19日。それはめぐみちゃんの赤ちゃんが産まれる日である。やぎの出産は交配日から数えて5ヶ月、150日と言われている。何日かの誤差はあったとしても前後一週間を越えることはないと言われている。

子供達にとってその出産はとても大きな意味を持っていた。お乳が飲みたいという自分達の夢をかなえる第一歩でもあるからだ。

5月に入り、教室の中でもあわただしさが増してきた。以前からお世話になっている山羊園の竹前さんから、赤ちゃんが産まれたら何をしたら良いかの説明文を繰り返し読む子供。家で自分が産まれた時の様子を聞きとってくる子供達。その日のための準備が進められていた。

しかし、日は近付けど、その徴候がいっこうにあらわれないうまま、その日を迎えてしまったのである。不安に見つめる子供達の中には、「お医者さんに見てもらおうよ。」「あんなに走りまわっていたから、赤ちゃんが産まれないのじゃないの。」などとつぶやく姿が見られた。

そして、予定日より5日過ぎた日、獣医さんをお呼びして見ていただくことになった。

結果は悲痛であった。

「みんな赤ちゃんが欲しい気持ちはわかるけれど、めぐみちゃんはね、産まれた時から赤ちゃんが産めない体のようなね。つまり、赤ちゃんのもとになる卵ができないんだよ。」

声も出さずにその話を聞いていた子供達。悲しみをこらえるのが精一杯のようだった。

竹前氏によると、めぐみちゃんは、この種のやぎによくある、メスに近い中性のやぎだとい

うことであった。

『あたらしいなかまがくるよ』

めぐみちゃんの出産がかなわなかった子供達は、これからのくらしについて話し合った。

「めぐみちゃんは赤ちゃんができないからめぐみ幼稚園に返したほうがいい。」

「いくら赤ちゃんができないといっても、かわいそうだ。」

「2年生の終わりでかりて世話をするってやくそくした。」

2・3日こんな議論が続いた。そして政幸の、

「広場でぼくがいくとメェってないで近付いてくる。えさをあげるとよく食べてくれる。なでえげると気持ちよさそうな顔をする。ぼくはめぐみちゃんがかわいいから返したくない。」という言葉にゆり動かされ、2年生の終わりで「いっしょにくらそう」ということになった。

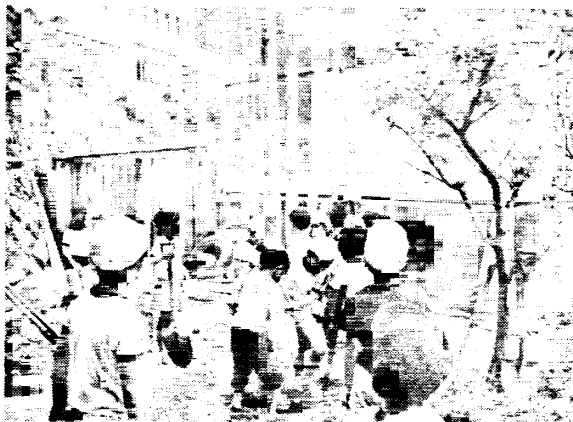
その日の午後、めぐみ幼稚園から、「桐生の岡公園でオスとメスのやぎさんを貸して下さる」との連絡が入った。大喜びする子供達……。

先生方・子供達と相談し、その2頭のやぎさんも飼っていこうということになり、新しいなかまを迎える準備が始まった。

「今の小屋じゃ三頭が入れないから家を大きくしよう。」

それから一週間あまりの日々は、新しいなかまを迎えるうれしさで仕事が進んでいった。

ちょうど梅雨を迎える季節。3月頃の長雨で、めぐみちゃんと遊べぬ日々が続いたことをもとに、50㎡ほどの広さの雨の日でも遊べる場所を作ることもなっ



た。木をいただくのでは悪いということで、今度は、売っていただくことになった。屋根の高さを決め木を切り、柱の本数を決め穴をほり、曲がっていないか確かめながら進める子供達。

教師の手をほとんどかりずに仕事が進められた。

そして、6月9日。2頭の新しい家族が増えた。みほちゃん、はるおくんである。

『えさ代は?』

2頭のなかまが増え、こまったのはえさのことである。始めのうちは、およそ1ヶ月分動物園からいただいてきたもので間に合った。しかし、広場づくりでわけていただいた木の代金といい、これからのえさ代といい、まったくそのお金の出どころは考えていなかった。

学級費の中から出してしまうえさ代だが、この費用の捻出も子供達の生活の中からと考え話し合っ決めてさせることにした。

社会科の学習で農家の仕事を勉強した時、田植えをする池森さんを見て、「ぼくもやりたいな。」と言った大輔。お米を売って自分達のくらしに役立てているという話を聞き、お米を作ろうということになった。また、学校へ来る途中、さつまいもの苗植えを見ていた夏樹は、「さつ

まいもを作ろう。」と朝の会でさげんだ。

池森氏の田を利用させていただき、秋の取入れまでの体験活動が始まった。

学校の畑を使って、さつまいも作りも始めた。自分達の力でお金をつくり出そうという計画である。

また、お店の仕事を学習して、「自分達でもお店を開こう。」ということになった。それぞれの家庭から野菜を持ち寄ったり、池森さんや知り合いの農家からきゅうりやエンドウ豆を仕入れたりした。



値段も、スーパーや近くのお店で調べあげ、仕入れ値を決め、売り値を決め、7月の授業参観日にお店を開いた。

持ち寄ってくれた家庭への支払い、農家への支払いを済ませ、借りていた木の代金、えさのふすまを3袋、ほし草を1袋買って残りのお金は72円。メェメェめぐみという名前で貯金することになった。

『たてないよ』

9月、残暑が身にこたえるような日、幸子があわてて泣きながら教室へ飛び込んできた。

「先生。はるお君が口からあわを出して立てないよ。」

かけつけてみると、うなり声をあげながら横たわっている。

すぐ獣医さんに連絡した。獣医さんの「できるだけ涼しい所に。」との指示で、子供達は下しきを片手に必死になってあおいだ。

「どうやら腰麻ひらしい。」との獣医さんの悲痛な声。子供達はもう起き上がれないかもしれないという予後の悪さを知らされた。私も途方にくれた。

みんな昼食をとる元気もなかった。

ところが、数時間がたち、みんなで見ているとよろけながらも立って2～3歩。歩いたのだった。子供達の表情が変わった。何度も繰り返しているうちに、よろけながらも歩くようになっていた。

翌日、再診に来られた獣医さんも驚いていた。「こんなに歩けるとは思ってもいなかった。」

子供達の団結力のすばらしさ。そして命へのあふれるほどの愛情の深さに、たのもしさを感じたのである。生命の尊さを身を持って味わうことができた。

この時、みほちゃんは、はるお君と結婚式を済ませていた。

『はな合わせができるよ』

自分たちの背たけより大きいやぎ。つものあるみほちゃん、はるお君。この大型動物を苦手とする子供達もいた。

学などは、えさをあげる時、自分達のところへやってくるやぎをこわがり、同じなかまの女

の子のすぐうしろにかくれてしまう。

達也は、うしろから近付き、しっぽをそっとなでるのが精一杯だった。

しかし、その達也が日記にこんなことを書いてきた。

「ぼくは、はじめてはなあわせをしました。めぐみちゃんのはなにをするのだろうとかんがえているようでした。ぼくは、はなあわせを試みたらめぐみちゃんのいきがきこえました。めぐみちゃんが、かおをふると、ぼくはあたまをはたいて、またはなあわせをしました。めぐみちゃんのはなはいきもちでした。」

やぎに寄り添い、少しずつ近づいていった達也の心の声を聞く思いがした。

するどい観察力、ひとりひとりの学びの深さを子供達の成長の姿の中に見ることができた。

『おなかがふくらんだよ?』

広場のかえでの葉も落ち、冬の季節を迎えた。

三頭のやぎさんたちは、広場で小春日和の一日を楽しくすごしていた。

侑子が、

「この頃みほちゃんのおなかが大きくなったようだね。」

子供達が、「ほんとだ。ほんとだ。」と口々につぶやいた。

時をあわせるかのように、算数の学習で長さの勉強をしていた。ものさしを持ち寄り、みほちゃんのおなかの大きさをはかろうとするが、ものさしでは正確に測れないことに気づいて、メジャーをつくらうということになった。1cmおきにするしをつけ、ひとりひとり1m50cmのメジャーができた。

みほちゃんの体だけでなく、三頭のやぎさんの体の大きさも測ることになった。これは、やぎさんとのくらしの終りに作った、「思い出の像」作りに役立った。

今まで量っていた、やぎさんが1日に飲む水の量調べとともに、この日から、みほちゃんのおなかの大きさ調べが始まり、「学習の生活化」へとつながっていった。

『赤ちゃん誕生』

年が明け、日増しに大きくなったおなか。

でも、子供達はめぐみちゃんのことを思うと、赤ちゃんができるかどうか不安な日々を過ごしていた。

そんな話を、長野にいる竹前さんにお話すると、福島へ出かけた帰り道に寄って下さるとのことであった。

子供達全員で竹前さんをお迎えした。





見ていただくと妊娠は、ほぼまちがいないとの話を聞いた。

いよいよ出産の準備、予定日は2月10日頃であった。

赤ちゃんが産まれるまでの準備を読み返したり、タオルを持ちよったりして、その日にそなえた。

そしていよいよ、出産の徴候が表われたのは、2月10日であった。

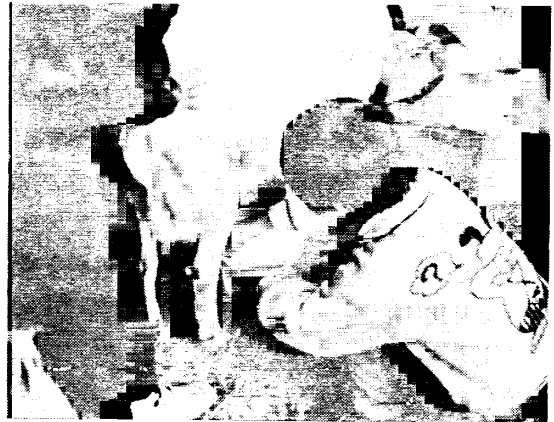
その日は日曜日。朝、子供達と一緒にえ

さくれをしようと広場へ行くと、みほちゃんの乳がはっていた。すぐ竹前さんに連絡すると、「今日産まれるでしょう。」とのことだった。大急ぎでクラス全員に連絡をした。親子共に来る子供がほとんどで、初めて見るやぎの出産に皆心をおどらせていた。

しかし、うめき声をあげるだけでいっこうに産まれない。すこし見ているのにも疲れが出始めた昼過ぎ、第1子が誕生した。

続いて第2子の誕生。合わせて2頭の赤ちゃんの誕生である。

「2月10日にみほちゃんの赤ちゃんがうまれました。茶色い赤ちゃんと白い赤ちゃんがうまれました。



かわいいな。と思います。出てきたときはぬるぬるしたものがついていたけど、みほちゃんのがなめて、とってくれました。すぐに茶色い赤ちゃんが立ちあがりました。」（政幸）

初めての出産との出逢いをこのように記していた。

子供達にとっては二度とない経験かもしれない。この日から約1ヶ月5頭のやぎさんとともに心ゆく日々を送った子供達である。生命の尊さを再び味わった子供達でもある。

『さよならやぎさん』

みほちゃんの乳しぼり。親やぎへのえさくれ。そして広場のそうじと毎日忙しい日々にあけくれていた。そんななかでも、やぎさんをつれてのさんぽは楽しかった。みんなでかたくり広場へ出かけた。春のにおいを、やぎさんとともにかぎながら、始終この活動をあたたかく応援して下さった小松先生御夫妻も一緒にみんなで山登りである。赤ちゃん（名前は三日考えて、はるお君とみほちゃんの子なので茶色い方が春美ちゃん、白い方は、白くてきれいなやぎさんになってほしいとの願いで白美ちゃんと決まっていた。）とは、最初で最後の散歩である。

かたくりの芽がようやく出た山道を登りつめ、1年生の頃から遊んだかたくり広場に着いた。そして、やぎさんとともに心ゆく一日を過ごしていた。

そしていよいよおわかれの日、3月16日を迎えた。

やぎさんは、子供達で相談し、全員竹前山羊園で引き取って下さることになっていた。

「めぐみちゃんはめぐみ幼稚園から来たのだから、めぐみ幼稚園に帰した方がいい。」

「めぐみ幼稚園で三才八月過ぎしたから、実家へ帰った方がうれしい。」

「はるお君、みほちゃんと赤ちゃんは、桐生の岡公園がいいよ。」

そんな意見をおしのけていったのが



「メェメェという名前がみんなついているでしょ。だから五頭はみんないっしょの方がいいよ。」という佳恵の意見が心に響いた。その話を進めるうち、めぐみ幼稚園と桐生ヶ岡動物園から、「そんなにたくさんのやぎは引き取れない。」との返事があった。みんなで竹前さんにお願いした。竹前さんは心よく引き受けて下さり、やぎは足利まで引き取りに来て下さることであった。(教師は、やぎさんとの生活が始まる時、この時を予想し竹前さんには1年半前すでにお願ひしておいた。)

やぎさんはめでたく、家族そろって長野へ旅立つことができた。

「3月16日に、やぎさんとおわかれ会をしました。おせわになったおかたを、ごしょうたいしてやりました。」

竹前さんが、メェメェファミリーをつれていきました。はるお君がとってもいやがって、足をひきずっていました。体いくかんのゆかには、そのあとがのこっていました。かなしくてなっていました。お母さんがたもなっていました。みんなでつくったおわかれの歌、歌いました。竹前さんもいっしょうけんめいそだててくれると思います。」(寛子)

今まで無我夢中になってすごしていたものがすうっと消え、さみしさでいっぱいの日だった。

この三週間後、思いをつのらせ、子供達は長野県須坂市竹前山羊園まで五頭の山羊さんに逢いに行ったのである。

帰りのバスの中で歌った「さよならやぎさん」は、つらかった。

☆めぐみちゃんおさんぽがたのしかったね
れんげの広場でくびかざり思い出がいっぱいでも今日はわかれの日
さみしいけれどさようなら
いつまでもいつまでもげんきでね♪

(作詞・作曲 松田小2年)



— 学び得たこと —

この体験活動から子供達が学び得たことを振り返ってみた。自分なりに考えて成果として次の点が挙げられる。

- 子供達の意見を尊重し時間をかけた話し合いをすることにより、低学年の子供達も自己表現を豊かにし、相手の気持ちを考えて発言するようになった。
- つらい仕事も目標を持ってやりぬくことにより、少しぐらいの困難にも負けない精神力を培うことができた。
- 教科の学習でも、自分達の生活とつなげた学習になり、1年生、2年生のねらいをのりこえて学習する意欲を培うことができた。

うまく表現することができないが、ほかにもたくさんの成果があった。

たとえば3年生になり、他の先生に教えていただいているが、算数の研究授業で大きな数の学習で「これは数直線で表わすのは無理だからほかの方法で学習しよう。」と言われたのに対し、子供達の中には、「やれないことはない」と考えたのか、とうとうその時間にゼラ紙4分の1の用紙にやりぬいていた。

これだけの活動のなかで反省すべき点もないわけではない。

現行の学習指導の中で教科の学習とこの活動をどのようにつなげていくかという課題である。しかし私は思う。子供達はすべからず、教科の学習の枠を乗り越える意欲で教科の学習にのぞんでいた。自分の持ちうる能力のすべてを表出する姿がそこにあった。学習に遅れがちな児童も、一步一步壁を乗り越えるかの如く学習に立ち向かっていた。



要は、私たち教師がひとりひとりの児童の持ちうる能力を適確に把握し、ひとりひとりの児童の伸びゆく姿を認め励ますことを惜しまないことである。

なぜなら、みんな伸びる力を持った子供達だからである。

最後に、この活動でもっとも貴重な体験は、様々な人々とかかわるなかで人と人のつながりの大切さを実感として味わったことである。

子供達を支えて下さった地域の方々、やぎさんと子供達の情愛の深さを見直していた桐生ヶ岡動物園の大門さん、めぐみ幼稚園の方。終始励まして下さった日野市教育委員会小松恒夫先生、長野市立小田切小教諭牛山栄世先生そして松田小職員と安藤重雄校長先生、やぎさんの世話を教えて下さり、出産の日は一日中電話のそばを離れずに見守って下さり、やぎさんの親となってくれた竹前末雄さん。子供達とともにあらためてお礼を言いたい。

ありがとうございました。

はるみちゃん・しろみちゃんの赤ちゃん誕生を聞いた日に――

評

教育課程審議会答申は、生活科新設の趣旨として「低学年児童には具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴がみられるので、直接体験を重視した学習活動を展開し、意欲的な学習や生活をさせるようにする」ことをあげている。すなわち、小学校低学年児童においては、直接体験を重視することによって、学ぶことの楽しさを体験できるようにし、さらに、そこで学習したことを次の学習に生かしたり、児童自身の生活に生かしたりしようとする意欲や態度などを育てることが大切であるとしている。

本実践研究は、山羊との関わりを通して各教科、道徳、特別活動の学習を児童の生活に結びつけたものにしていこうとする試みであり、意欲的な生活や学習を引き出すことに成功している。「やぎさん」の存在は、児童に生き生きとした毎日の生活をもたらし、学習への取り組みにおいてもがんばる力を与え、さらに次の学習への意欲を引き出すこととなった。小学1年から2年までの、2か年間にわたる児童の生活や学習のようすが、子供の言葉で生き生きと描かれており、本実践研究は、新設された生活科の学習を組み立てる上でもいろいろと示唆に富むものである。

しかし、児童の日常の生活圏を学習の場とし、自らの活動を通して気づき、考えるという、児童が主役の学習過程で自立を目指す生活科の観点からすると、実践記録に描かれている山羊の存在は、児童の生活を非日常なものに変えてしまうほどに大きなインパクトを持っており、その意味ではいくつかの課題もありそうである。

それにしても、児童に大きな感動をもたらしたこの実践へのご努力には深く敬意を表し、あわせて今後の一層の活躍を祈念する次第である。